

# 令和6年度 友松会総会 【報告】

日時 令和6年6月30日(日) 13:30～

会場 横浜市教育会館ホール

友松会スローガン「深まろう 高まろう つながる会員 つながる大学」

～ 新しい時代にふさわしい豊かな活動を ～

## ＝ 総会次第 ＝

### 第Ⅰ部 総会

開会の言葉 国歌斉唱 物故会員への黙祷

会長あいさつ 実行委員長あいさつ

来賓祝辞 来賓紹介 会務報告

卒寿会員紹介・記念品贈呈

松沢研究奨励賞贈呈

閉会の言葉

### 第Ⅱ部 研究発表会

発表者・講師紹介 研究発表・講評

### 第Ⅲ部 次期総会に向けて

師範学校校歌斉唱 学生歌「みはるかす」斉唱

次期総会開催ブロックあいさつ

閉会の言葉

## 小島 勝 会長あいさつ (要旨)

本総会開催にあたり、ご尽力くださいました半島ブロックの皆様にご心より感謝申し上げます。

今回の総会は、参加者の制限をなくし、多くの皆様にお集まりいただきました。ご来賓も横浜国立大学



学長梅原出様、教育学部長鈴木俊彰様をはじめ、校友会、各同窓会の皆様、そして、友松会の歴代会長の皆様をお迎えして開催できますことを皆様と共に喜びたいと思います。

1874年(明治7年)横浜、日野、羽鳥、浦賀に小学校教員養成所ができたことを起源とする横浜国大は、本年、創基150周年、開学75周年を迎えました。この150周年に際していくつかの記念事業が計画されています。教育学部では、学生歌「みはるかす」の歌碑を建立することになっています。友松会としても、特別会計から100万円の寄付をすることとしております。歌碑が建立されるのを楽しみにしております。

本日配付された会誌「友松」には、理科と心理科のミニ同期会・同窓会の報告が掲載されて

います。友松会では、卒業年度の違う会員が一堂に会する県総会や新春のつどい・支部総会の他に、同じ卒業年度の会員が集う「同期会」の開催も呼びかけて参りました。同期の仲間をはじめ、卒業生同士が必要な時に連絡を取り合える手立ての一助として、友松会名簿を整理し直すことが検討されています。皆様のご意見を広くお聞きして検討を進めて参りたいと思います。

今年の横国Dayは11月10日(日)に開催予定です。例年、横国Day当日に行われております「豊かな教育を考える会」については、研修部を中心に2年にわたってシンポジウムの計画・準備を重ねて参りました。来年の新春のつどいは1月26日(日)、総会は6月29日(日)に湘南ブロックの担当で開催予定です。

友松会には現在、会費納入者の減少をはじめ、解決すべき課題はまだ残されております。これらからこれらの課題の一つずつ着実に取り組んで参る所存ですので、皆様のより一層のご理解とご協力をお願いいたします。

## ▽来賓祝辞▽ (要旨)

### 横浜国立大学長 梅原 出 様

2年ほど前に台風科学技術研究センターという日本で初めての台風に関する研究センターを立ち上げました。教育学部の地学の先生を中心に、日本中の大学の台風研究者や気象庁の研究者などいろいろな方に集ま



っていただいて、活発に日本の台風研究のハブとして頑張ってください。次は国際拠点にしたいと考えています。

教育学部は知の宝庫であるというのが私の持論です。教育学部の先生とディスカッションしながら、よい研究・教育を伸ばしていきたいと思っています。そのためにも皆様のご支援が必

要と思っています。友松会におかれましては、同窓会の方々と一緒に横浜国立大学を盛り上げていただけるとありがたいと思います。

総会の開催おめでとうございます。

## 横浜国立大学教育学部長

### 友松会名誉会長 鈴木 俊彰 様



教育学部は本学に限らず全国的に教員就職率が低いという問題を抱えています。昨日オープンキャンパスを実施したところ、多くの来場者がありました。教員になりたい人が減っているのではなく、より教員になりたいという強い思いがある学生のニーズに大学が応えられたことが原因の一つではないかと考えています。

教職に不安を感じてしまう学生、もしくはあきらめてしまう学生も少なからずいることから、このことにつきましては友松会の皆様のお力添えとサポートをいただきながら、安心して教職を選択できるように学生を指導、支援していきたいと考えています。

私は数年前、学校教育課程の課程長をさせていただいた時から、友松会の会に何度か参加させてもらいました。平成、令和と学生の参加者が少ないと感じているところです。私自身は本学出身ではありませんが、友松会の一員として取り組んでいきたいと思っています。今回、私の方から学生に連絡させてもらいました。今日の学生の参加人数は少ないですがこれから増えていけばと考えているところです。

友松会を盛り上げていくことは、学生が安心して教職に就くということに直接的につながると考えています。友松会、教育学部が一緒になって、様々なことに取り組んでよい関係を作っていければと考えています。

## ▽松沢研究奨励賞贈呈▽

横浜市立山元小学校主幹教諭 小林 宏幸

横須賀市立武山中学校総括教諭 落合 洋俊



## 松沢研究奨励賞 研究発表

[研究内容は「友松114号」に掲載]

○小林 宏幸 氏 研究主題

「『その子なりの納得の姿』を大切にしたい  
社会科の授業づくり」  
質疑 (要旨)



(感想) 本研究は、道徳的にも意味があると感じたが、児童の「勇気ある発言者になれなくても、勇気ある発言者を支えられるようにしたい」との発言に注目

したい。講師の先生からいじめの4層構造という説明を聞き、傍観者の中の何人かに言い返せる力を持たせられれば、いじめは防げると強く感じた。

講評 (要旨) ※児童名はすべて仮称

大塚 俊明 氏 鎌倉女子大学教育学部教育学科准教授

目指すべき教師像に「生活的教師」がある。教師は、指導案の作成・授業実践だけでなく、それを振り返り、よりよいものにしていく努力が重要。本提案からその重要性がよく理解できる。発表で提案された「本時の座席表指導案」がポイントになる。ここで、一人ひとりの子どもを位置づけている。さらに「本時の発言関連図」である。正確な発言記録をとって、授業を振り返っている。大切なことは、児童が課題をどう追求していったか。それがきちんと記録されていた。「授業という学びの営み」と「生活の場としての教室」が結びついていた。



先生は、子どもの生活と授業をしっかりと重ね合わせていた。今回は川原さんに注目していた。川原さんの迷いが、他の児童の「工場がなくなったら困る」という発言からでてきた。深く考え、町の発展に貢献してくれた工場で、働く人達は工場が有害物を流していることを知っていたのか等、様々な角度から考える姿勢が育っていることが驚きだった。さらに患者家族のSさんが町の人から差別を受けることまで考えている。そこまで考えつつ、批判しきれない自分の弱さにも向き合っている。いじめに「被害者、加害者、いじめを後押しする観衆、傍観者」の4つの関係性を考えさせられる。



学習指導要領では、公害の学習の解説で人々の協力や努力に着目してとある。この人々とは誰か、教材研究者として考える必要がある。そこに、被害、加害の人達の存在を読み取れるか。誰もが、被害者にも加害者にもなり得る。中本さんや川原さんの発言につながると思う。

最後に、自分の間違いに気づき、学びながら「問い続ける子ども」を育てたい。「問い続ける子ども」を支える要素として「他者」つまり「学級環境」が必要であり、これらをつなぐ「教師の指導性」が大切だと考える。

#### ○落合 洋俊 氏 研究主題

「持続可能な部活動の取り組みを目指して」



#### 質疑 (要旨)

(感想) 経験のない部活の顧問を持たされ苦勞した経験がある。生徒と一緒にやったら楽しくなった。小学生に中学で何が楽しみかと聞くと部活動と答える。部

活動の意義を感じる。

一方、管理職として今の働き方改革の中で教員への負担を強く感じる。落合先生の実践の例など多くの示唆があった。今後生かしたい。

#### 講評 (要旨)

丸瀬 正 氏 元横須賀市教育委員会指導課長

部活動の地域移行については、多くの課題から、令和4年12月通知「学校部活動および地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」で新たな方向性が示された。



内容は4つ。(1)学校の部活動(2)新たな地域のクラブ活動(3)学校の部活動と地域連携、地域のクラブの活動移行への環境整備(4)大会等の在り方の見直し。大会等の見直しは、全国中体連等の全国大会を縮小する。地域移行は、部

活動を休日地域クラブ活動に移行する取組が始まった。この活動は、1つは、市町村が指導者を地域に派遣、子どもたちが通う形。もう1つは、総合型地域スポーツクラブや各スポーツ協会等が地域クラブ活動を主催し、子どもが参加する形。本発表は後者のパターン。今回の通知では、どの団体も指導者や場所の確保など課題が多く、移行は努力目標という形になった。

一方、全国の保護者アンケートでは、部活動のメリットとは何かの問いに、保護者は、仲間が出来る68%。体力・精神力がつく57%。社会性・協調性が身につく48%と回答。専門的な技術指導への期待は4分の1以下。また、地域移行への賛否は、賛成43%、反対12%、分からない44%。反対の理由は、お金がかかる、負担感がある、送迎が必要等である。

さらに、神奈川県の中学生数は、ピークの昭和61年36万から令和5年19万と大幅減。一方、公立中学校数は微減で、校内で少子化が進み、教師数減だが、部活動数は減らない。落合先生の発表につながる。部員数が一番減ったのは野球部。平成13年と比較し半減。サッカー部も一度増えたが減少。上位のソフトテニス、バスケットもほぼ横ばいという流れ。

最後に外部指導者の現状と課題を整理したい。神奈川地域指導者データベースでは、県全体でわずか登録106名。横須賀市では、市予算の派遣が運動部では48人年35回。謝礼1回3,200円で実施。文化部は23人、25校で実施。

期待される総合型地域スポーツクラブ連携は進んでいない。今後の取組を考えた時、落合先生が言われた課題をどう克服するか。各部活、地域クラブが指導者を確保できるか、切実な課題だ。高齢化が進むと指導者の確保が難しい。定年延長で中学の退職者がいない。いままで退職者が指導者となったが、今後確保できず、退職した段階で既に高齢化という問題が出てくる。課題は多いが、子どものため、行政や学校、教員、地域の協力の中で改善していきたい。

